



Title	コウヤマキ材木棺の展開と畿内弥生社会
Author(s)	福永, 伸哉
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2025, 58, p. 1-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100913
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

コウヤマキ材木棺の展開と畿内弥生社会

福永伸哉

キーワード：弥生時代／畿内地域／木棺／棺材樹種／コウヤマキ

はじめに

弥生時代において木板を組み合わせた棺が用いられた事実が判明し始めたのは 1960 年代のことであった。1961 年に山口県梶栗浜遺跡で墓壙上の石材の落込み状態から木棺様の施設の存在が推定されたのに続いて（金関 1961）、1963 年には福岡県亀ノ甲遺跡で棺材の痕跡が土質の違いとして確認されるなど、九州北部地域でその認識が進んだ（小田 1964）。いっぽう、畿内地域では 1965 年尼崎市田能遺跡、1966 年東大阪市瓜生堂遺跡、1967 年豊中市勝部遺跡などの低湿地遺跡で、木質の遺存した木棺そのものが次々と発見され、間もなく実物資料に基づいた考察が開始されることとなった（河内考古学研究会 1968）。その後は、木棺の形態や構造の違い、その社会的意義などに関する基礎的研究が行われるとともに（春成 1985、福永 1985・1987）、木棺墓出土遺跡の報告書でそれぞれの事例分析が示されてきた。ただ、実物資料の出土が徐々に増えてきたとはいえ、細部が観察できる良好な遺存例が畿内地域の低地部に限られる傾向は依然として変わらず、調査・分析アプローチの工夫を含めて、引き続き辛抱強い研究が求められるところである。

さて、弥生木棺墓研究の草創期に河内考古学研究会によって発表された上述の考察は、検討例がまだ 20 例に満たない資料的制約の中で、後に筆者が「Ⅱ型木棺」に分類した底板上に小口板を乗せるタイプ（福永 1985）の構造

的特徴をよく把握している。さらに、確認された棺材樹種がコウヤマキである点に注目して、前期古墳の木棺材にコウヤマキが卓越する現象との関連を念頭に「コウヤマキという棺材の選択が、すでに弥生時代中期において、当時の人々によって行われていることを示す」という認識に至っている点が特筆されるのである。

それから半世紀余りが経過した今日、部分的な遺存例を含めれば弥生木棺の実例は250例を超え、コウヤマキ以外の樹種を用いた例も少なからず認められるようになったが、棺材の遺存例が多い畿内地域ではコウヤマキ材木棺の数は突出して優勢である。いっぽうで、弥生木棺におけるコウヤマキ材の利用は、時期的、地域的に相当の偏差を持ちながら展開している実態も見え始めてきた。小稿では、弥生時代における木棺構造や樹種選択の全体的様相を整理した上で、畿内地域におけるコウヤマキ材木棺の展開状況とその意義や背景について、二、三の考えを提示してみたい。なお、弥生時代には少數ではあるが削抜式木棺の存在も棺材の断片や土層観察等から知られているが、以下では部材の流通という観点も意識して、検討対象を組合式木棺に限定することをまず断っておく。

1 弥生木棺墓の定型型式とその推移

初現期の木棺墓 埋葬にあたって遺骸を収容する施設を構築する行為は、縄文時代後期には石組石棺墓などの形態で列島各地で認められるようになるが、弥生木棺墓の源流になるような板材を用いた棺が現れ始めるのは現状では縄文晚期頃からと考えられる。良好な遺存木棺の検出例には恵まれないものの九州北部から本州西部の遺跡で初現的な木棺を使用した墓葬遺構の報告例が徐々に増えつつあり、この時期の初現的な木棺墓の様相については、大庭孝夫氏、中村健二氏、澤下孝信氏らが専論的な整理・分析を行っている（大庭2002、中村2002、澤下2009・2010）。

遺構の構造としては、側板と小口板を立てた際の細い「溝」が墓壙底に

検出されるものが比較的多いいっぽうで、「溝」はないが裏込土や裏込石によって木棺の存在が確認される場合もある。時期的には縄文晩期前葉と報告されている山口県下関市御堂遺跡の木棺墓群が最古段階の事例となる。その後、突帯文土器段階にかけて報告例が増えていくが、伴出遺物によって確実な時期比定ができるものは少なく、時期的な展開の把握を難しくする一因となっている¹⁾。とはいっても、晩期後半頃から東への広がりを見せ始める初現期の方からは、朝鮮半島を発信源とし、九州北部地域でまず導入された木棺墓の情報が、板付式土器の波及に先んじて、突帯文土器段階の情報交流の中で本州西部に広まったと見ておくのが妥当であろう。

初現期木棺は棺材の残る実物例がほとんどないために樹種選択については不明な点が多いが、福岡県粕屋町江辻遺跡において底板残片がカヤ材と推定されているのは貴重な情報である（新宅編 2002）。またごく近年では、島根県大田市古屋敷遺跡で本来の姿はとどめていないものの棺材の遺存する突帯文土器単純期の 2 例が見つかっている。A 区 SK2 は墓壙底に側板を立てる細い掘り込みを有し、少なくとも西側の小口板は底板上に乗っていたとされる（伊藤ほか 2017）。D 区 SK01 では側板、小口板を内側から数本の杭を打って支え、その内部に底板を落とし込むような構造が確認できる（林編 2017）。いまだ後の弥生木棺墓のような定型的な姿には至っていないが、板材を用いて棺を組み立てる意図は明瞭である。

弥生木棺の定型 2 型式 弥生前期になると九州北部から伊勢湾岸に至る地域で定型的な 2 つの型式の木棺墓が広く認められるようになる。墓壙床面の短辺部に溝状掘り込み（いわゆる小口穴）を設けて小口板を埋め込んで固定するもの（筆者の I 型木棺）と、底板の上に小口板を立てることを大きな特徴とするもの（II 型木棺）である（図 1）。I 型については、中期前葉以降の資料を見ると、底板と小口板の組み合わせ部分の構造にいくつかのパターンが認められる。また II 型の場合も、底板の両短辺側を溝状に抉ったり段状に削ったりして小口板の安定を図ったものとそうした加工が見られないものがある。このほかに第 3 の木棺型式として、丘陵上遺跡などでは地山を掘り

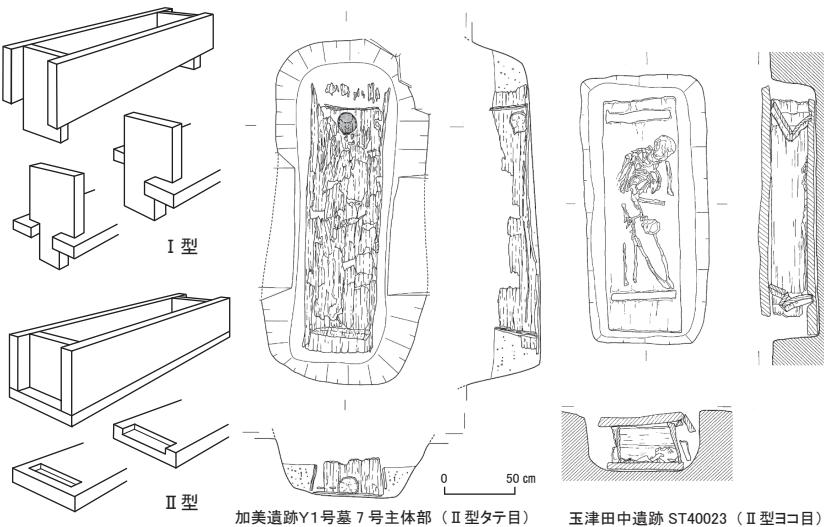


図1 弥生時代木棺の主要型式（遺構図は各報告書より、一部改変）

込んだ墓壙壁の四隅をさらに抉り、そこに棺材をはめこんで固定するものも推定しうるが（Ⅲ型木棺）、実物資料の遺存例がないため小稿の検討対象からは外しておく。

ここでⅠ型とⅡ型を「定型的」と呼んだのは、細部の形態差を含みながらも各地ではほぼ同じ組み立て原理を共有しているためであり、木棺実物の実見を含めた地域間での情報交流の結果として形態の共通性が明確に表れたと推定される。これらが上述した出現期の木棺墓から連続的に発展したものなのか、その後の渡来系の波の中に新たな構造的な規範が存在したのかどうかはなお不明であるが、実態としては九州北部地域から板付式土器の東伝とともに、定型的なⅡ型式が瀬戸内海側と日本海側の双方のルートで広まり東海西部まで弥生前期のうちに到達したことは確実であろう²⁾。

弥生前期のⅠ型木棺は、島根県松江市堀部第1遺跡、東大阪市池島・福万寺遺跡、岐阜県大垣市荒尾南遺跡などで実物資料が見つかっているほか、九州北部から東海地方にかけて墓壙底の小口穴の検出によって広く普及していく実態が確認できる。実物資料が残る八尾市田井中遺跡、八尾市・東大阪市

山賀遺跡、東大阪市鬼虎川遺跡などの事例を見ると、畿内地域では中期前葉まではⅠ型が墓地内の多数派型式となっており、弥生木棺の初期の波及段階では中心的な型式であった可能性が高い。

これに対してⅡ型木棺は、前期の明確な実物資料が見られず、中期前葉の山賀遺跡において実物例が確認されているものの、数量的にはⅠ型に対して従の存在であった感は否めない³⁾。畿内地域でⅡ型が増加を見せるのは中期中葉からであり、中期後葉以降は圧倒的な主流型式となっていく。次章で分析するように、畿内地域におけるその増加の過程は時期的にコウヤマキ棺材の使用が顕著になる過程と重なっているように思われる。

もっとも、中期中～後葉段階の畿内地域でもⅠ型木棺が消滅してしまうわけではなく、少数はあるがⅡ型木棺と混在して存続する。筆者は、使用する木棺型式には集団ごとにある程度の共通性があり、その型式を用いる行為が被葬者の集団帰属や親族系譜との関わりを示唆する可能性があると考えている。こうした理解に立てば、畿内地域においてⅡ型が多数を占める墓域にⅠ型が少数存在している場合は、近隣か遠隔地かはともかく、当該墓域の造営集団と交流を持つⅠ型使用集団が同時期に存在しており、そこからの移入者がⅠ型木棺に埋葬されたために少数型式として顕在化したという解釈になる⁴⁾。

後期の畿内地域の状況は墓葬自体の検出例が少ない事情もあってなお不明瞭である。畿内以外の地域では近畿北部、瀬戸内、山陰などでⅠ型木棺が依然として多く用いられていることが小口穴の存在からうかがえるほか⁵⁾、東日本でも礫床木棺墓には小口穴が伴う場合が多い。Ⅱ型木棺も分布域を拡大したであろうが、こちらは棺材の遺存がなければ存否の確定ができないため、明確な実態はつかみにくい。

2 猥内におけるコウヤマキ材木棺の展開

弥生時代の木棺は、土層痕跡から一部に断面U字形の舟底状形態の例が認められるが、大多数は蓋板、底板、側板、小口板からなる組合式のもので

ある。手近な端材を集めたような粗製の少數例を除けば、巨木から切り出した長さ2m近い底板・蓋板・側板を用いるのが一般的であり、当時の工具類の装備から考えればその調達には相当の手間をかける必要があったと推定される。また、田畠の開墾や集落の増大によって原生林が開かれていく中で、とくに平野部では村々の成員が自力で適材を獲得し続けるのは容易でない状況も生まれたと想定される。本章では資料の蓄積が進んできた遺存木棺を対象として、棺材樹種選択に見られる時期的推移や地域的特徴を整理するとともに、畿内地域において数量的に卓越するコウヤマキ材木棺が有した社会的意義についても検討してみよう。

表1は、遺存木棺が検出されている遺跡で、一部の材でも樹種が報告書などで公表されている事例を集成したものである。基本的に一遺跡から複数の木棺が検出された場合を中心に取り上げているので若干の漏れはあるが、樹種報告例の9割以上はカウントできていると考えている。

縄文晩期～弥生中期前葉 まず、縄文晩期から弥生前期の初現期木棺においては、畿内地域の東大阪市池島・福万寺遺跡でカヤ、アカガシ亜属が確認されている。畿内以外では、スギ、カヤ、モミ、クスノキ、キハダ、シイ属などさまざまな樹種が見られるが、複数例の樹種が判明している島根県堀部第1遺跡、岐阜県荒尾南遺跡などでは、スギを主体として他樹種を部分的に混用しており、畿内地域以外でスギ材が多用される傾向がすでに現れている点が注意される。

中期前葉になると、畿内では八尾市田井中遺跡、八尾市・東大阪市山賀遺跡、東大阪市鬼虎川遺跡など、大阪平野南部の河内地域で遺存木棺の検出例が増加していく。地下水位の高い低湿地遺跡ゆえに木質の残存が良好であることに加えて、人口増加によって木棺墓の造営自体が活発になってきた状況もその理由として考えられる。樹種は多岐に及んでおり、針葉樹ではコウヤマキ、ヒノキ、スギ、カヤ、広葉樹ではクスノキ、ヤマグワ、シイ、カツラ、ケヤキ、ニレ属などが同定されている。

注目されるのは、棺を構成する各部材に同一樹種を用いる例が現れ、コウ

表1 弥生時代木棺の棺材樹種一覧
 (板目欄はY:ヨコ目、T:タテ目、-:遺存しないこと、?:遺存するが樹種未公表を示す)

ヤマキ、ヒノキ、スギなどの針葉樹でその傾向が認められることである。多様な樹種が混用されていれば手近な材を適当に寄せ集めたともいえるが、樹種が限定されるとなると、棺材用に選択・製材された特定樹種が「流通」する状況が生まれ始めた可能性を考える余地も出てこよう。また、多様な樹種が用いられる中でも、コウヤマキ、ヒノキの使用頻度が高くなっている点は、畿内地域におけるその後の樹種選択の傾向が表れ始めているといえる。木棺型式の上ではⅠ型が多数派となるもののⅡ型もたしかに存在しており、コウヤマキ、ヒノキが優勢となる傾向が、型式差を超えて認められる。畿内地域以外では中期前葉の資料には恵まれず、実態が不明瞭である。

弥生中期中～後葉 この時期には、棺材樹種、棺型式の両面で、畿内地域の標準的なあり方が明瞭になっていく。中期中葉の八尾市久宝寺遺跡と神戸市玉津田中遺跡では、樹種が公表されている木棺のほとんどがコウヤマキ材を用いており、古墳時代にまで続く畿内地域のコウヤマキ選択の姿を明確にとらえることができる⁶⁾。また、中期中～後葉の神戸市北青木遺跡、豊中市勝部遺跡、高槻市安満遺跡、大阪市加美遺跡、東大阪市瓜生堂遺跡、同巨摩廃寺下層遺跡、同巨摩遺跡などコウヤマキが多数を占める事例は広範囲に広がっており、畿内地域全域でコウヤマキ材の選択が標準的なあり方になったと理解できる⁷⁾。

加美遺跡の調査を担当した田中清美氏は、河内地域で中期前葉にコウヤマキの一枚板を使ったⅡ型式（筆者のⅡ型）の木棺が登場することに着目し、「コウヤマキ製Ⅱ型式木棺→コウヤマキ製Ⅰ型式（筆者のⅠ型）→ヒノキ・ケヤキ・ヤナギ製Ⅰ型式木棺というような、木棺の型式・用材の樹種を基準とした格差が生じていたと想定される」という見解を提示している。そして、河内地域では中期中～後葉に組合式木棺の過半がⅡ型式になる実態から、この時期に畿内地域では河内を分布の中心とするⅡ型式への統一が行われたと見る。さらに、コウヤマキ製のⅡa型式木棺を頂点とし、同じⅡ型式でもコウヤマキ以外の材を用いたものがこれに次ぎ、小口板を地中に埋め込むⅠ型式が下位になるような組合式木棺のランクが明確になったと想定する

(田中 1994、513 頁)。樹種と構造の両面から木棺の規格化とランク差を読み取ろうとする氏のアプローチには学ぶべき点が多い。

ただ、そうしたコウヤマキ優勢の河内地域においても、四條畷市雁屋遺跡のようにコウヤマキが少数派となる事例が存在していることは重要である。同遺跡では、方形周溝墓において樹種が確認できた木棺墓の 3 分の 2 にあたる 12 基でヒノキが使われており、コウヤマキ材木棺は他樹種との混用棺を含めても 5 基のみとなっている。田中氏は、雁屋遺跡について被葬者のうち周溝墓の中心的な埋葬にあたるものにランクのより高いコウヤマキ材木棺が用いられたととらえるが(同 510 頁)、周溝墓内の位置関係を見る限り、そういうとは断じきれない。

かつて筆者は、被葬者が他集団からの移入者であった場合に、棺の調達や埋葬施設の構築などに出身集団の者が関与することがあったのではないかと考えた(福永 1991)。出身集団と移入集団の間で採用する木棺型式に違いがあれば、移入後の共同墓地における少数派型式の木棺として顕在化することになる。このように考えれば、雁屋遺跡における棺材樹種の違いはたんに地位の優劣の関係ではなく、被葬者の親族系譜などの事情で理解する余地もでてこよう。先述したコウヤマキ材木棺が多数を占める遺跡においても、しばしばヒノキ材などを使った木棺が少数混在している例が認められる。ヒノキはコウヤマキよりも残存しにくいため、潜在的には雁屋遺跡のようなヒノキ優位の遺跡が畿内地域でほかにも存在している可能性は十分考えられる。そういう遺跡間の人間交流が異樹種棺の混在を生み出しているととらえておきたい。

とはいって、田中氏が指摘するように、畿内の中期中～後葉にコウヤマキ材木棺の採用が増大するのは明らかな事実であり、構造的にはⅡ型木棺が同地域で主流派の位置を占めるようになる時期でもある。河内がその動きの中心となるかどうかは別として、この時期にコウヤマキ材のⅡ型木棺という畿内の木棺墓の標準的な方方が形成されたと見て誤りはないであろう。このことはかつて酒井龍一氏が「畿内大社会」と呼んだ地域社会のまとまりが形成

される動き（酒井 1982）と連動しており、さらに、数百年後の古墳時代において畿内の首長・有力層がこぞってコウヤマキ材の木棺を求めた動きの遠い淵源にも相当すると思われるのである。

畿内地域でコウヤマキ材木棺が中心的な規範となった中期中～後葉において、他地域の遺存木棺事例は依然として少ないが、滋賀県草津市烏丸崎遺跡、静岡県静岡市瀬名遺跡、福井県小浜市府中石田遺跡などではスギ材のⅡ型木棺が主体を占めている。既述した弥生前期の島根県堀部第1遺跡や岐阜県荒尾南遺跡、さらには弥生後期の滋賀県高島市針江川北遺跡の例も含めて考えるなら、弥生時代の畿内地域外ではスギという樹種の選択が広く一般的であった状況がうかがえる。

弥生後期以降 猥内地域では墓葬自体の検出例が少なくなる時期であり、遺存木棺の得られた遺跡数も限られるが、巨摩廢寺下層遺跡、巨摩遺跡で後期前葉の資料があり、判明分では大半がコウヤマキ材のⅡ型木棺である。また、尼崎市田能遺跡でも後期以降と考えられるⅡ型の木棺例が複数検出されており、鑑定されたものではコウヤマキ材の使用が報告されている（福井ほか 1982）。中期後葉までに畿内地域で標準的になった方が継続しているといえる。加えて大阪市加美遺跡の庄内式期～布留式期の墳墓から検出された組合式木棺ではコウヤマキ材のものが報告されている。⁹⁾ 樹種選択の点で古墳時代のコウヤマキ材木棺への連続性を示す状況と理解できる。

ただし、一般成員の方形周溝墓群が解体した後の後期後半以降には、墳墓を築ける階層が限定されるとともに墳墓間の階層化も進行するため、木棺型式に中期中～後葉までのよう標準的な方が見えにくくなるのも事実である。その意味では、田中氏が、庄内式期～布留式期の加美遺跡においてⅠ型木棺を含む多様な木棺が見られることから、後期前半までⅡ型木棺が主体であった組合式木棺の統一が崩れたというとらえ方を示している点はたしかに首肯できる（田中 1994、512頁）。

共同体的な横並び意識の強い中期中～後葉の社会構造が変質する中で、後期後半以降には木棺は形態的な多様性を増し、被葬者の地位や格差を反映す

る新たな役割を担うことになるが、いっぽうではコウヤマキ材の重視や次述する小口板ヨコ目使いへの統一という点では、前代からつながる木棺の基本的な規範が畿内地域全域の有力者の間で共有されるようになったという評価も可能であろう。

3 コウヤマキ材木棺と畿内弥生社会

コウヤマキ材木棺の標準化 弥生中期中～後葉の畿内地域では、もっとも普遍的に使用された組合式木棺において、コウヤマキ材のⅡ型木棺という「標準化」がほぼ完成されたと考えられる。もちろんこの時期でも共同墓地では少数のⅠ型木棺が見られたり、コウヤマキ材以外の樹種が使われたりする事例もあるため、棺型式や樹種の違いが集団間の敵対関係や対抗関係につながるものではなかろう。それでもなお、標準的な組合式木棺といえるものが明確になっていく点は、畿内地域で生活を営む諸集団の間に死後はコウヤマキ材で作った同形の木棺に葬られるという思いが広く共有されたことを示唆している。

続く後期前半には、畿内地域のⅡ型木棺において構造的な標準化がいっそう進む点は興味深い。

旧稿で指摘したように、Ⅱ型木棺には底板上に小口板を乗せる際に、小口板の木目が垂直方向になるように立てるもの（タテ目使い）と水平方向になるように立てるもの（ヨコ目使い）の二者がある（福永 1987）。小口板は長幅の異なる長方形を呈する場合がほとんどであり、墓葬の現地でタテ目使い、ヨコ目使いを随意に選択しても密閉した直方体空間を正しく作るのは容易でないことを勘案するなら、棺を組み立てる6枚の板材を調達する段階ですでに小口板の用材法が計画されていた可能性が高いと考えるべきであろう。

表1には、Ⅱ型木棺の小口板の板目の情報を併記している。これを見ると中期までは河内地域でタテ目使いが多数派となるのに対して、摂津・播磨地

域ではヨコ目使いが優勢である。畿内以外の福井県府中石田遺跡や静岡県瀬名遺跡でもヨコ目使いが主流を占める事実を重視するなら、タテ目使いは中期までの河内地域集団において特に広がっていた小口板の用材法といえるかもしれない。¹⁰⁾ そうした中で、タテ目使いが主流の河内の墓地にもヨコ目使いの例が少数混在し、その逆のパターンが摂津・播磨地域の墓地でも認められることは、型式や樹種の異なる少数派の木棺が混在する現象の背景に集団間の人間交流を想定した先の理解が、同一型式、同一樹種の木棺であっても適用できる場合があることを示している。

後期以降になるとそうした独自のタテ目使いを伝統としていた河内地域においてもヨコ目使いが主流となっていく様子が東大阪市巨摩廢寺下層遺跡、巨摩遺跡の事例から読み取れる。この傾向は、中期にタテ目使いが主流であった大阪市加美遺跡において、庄内式～布留式期のⅡ型木棺がことごとくヨコ目使いに転じている状況からも補強できる。¹¹⁾

弥生後期には、広形銅矛、特殊器台、近畿式銅鐸、四隅突出型墳丘墓の分布に見られるような地域のまとまりが形成され、それがある種の政治的なまとまりとして機能するような局面が訪れたのではないかと推定している（福永 2001）。畿内地域では日常用土器にも「畿内第V様式」という一定の齊一性が見られるようになり、域内の人々が互いを「仲間うち」と認識し、畿内地域集団への帰属意識を持つようになった状況が想定できる。儀礼的要素を持つ墓葬という分野で認められる共通性もこうした地域アイデンティティの確認につながっていたのではなかろうか。

棺材流通のあり方 古墳時代の長大な割竹形木棺などに比べれば、弥生時代の共同墓地で用いられた組合式木棺は遺骸を収容するのに要するサイズを大きく超えるものはない。とはいえ、成人用木棺の底板や蓋板を「ミカン割り」の方法で得ようとすれば幹の直径が1 m以上の巨木が必要となる。直径1 m以上のコウヤマキの場合、樹高は30 mにもなり、そこまで成長するには数百年がかかることを考えれば、こうしたコウヤマキの樹林が平野部の集落のすぐ近辺に潤沢に存在したとは考えにくい¹²⁾ また、個々の墓葬の当事者

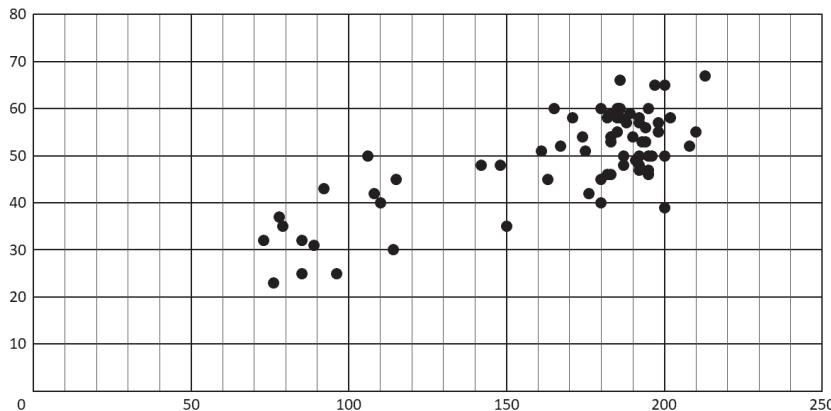


図2 畿内地域II型木棺の底板サイズ（弥生中期中～後葉） 横軸：長さ 縦軸：幅 単位cm

がその都度山腹の樹林に入って巨木を伐採し、運搬・製材を行って棺材を用意したと想定するのも現実的ではない。畿内地域においてコウヤマキ材木棺の標準化が進行した中期中～後葉には、コウヤマキ樹林を活動エリア内に持つ集団が、用材の調達や大まかな製材を行って、平野部の集落に供給するような流通の仕組みが存在した蓋然性が高いと思われる。

棺材の流通については、中期中～後葉の大坂市加美遺跡のY1号墳丘墓で用いられた棺材サイズに近いものが河内低地部の同時期の木棺墓に多く認められる実態に注目した田中清美氏が、同じ産出地から切り出された棺材が近くの集落に一旦集積された後に必要とする集落に搬出されるようなあり方を推定している（田中編2015a、120頁）。示唆的な見解であろう。

図2は、畿内地域における中期中～後葉のII型木棺のうち、ほぼ当初の状態を残す程度に遺存した底板について、長さと幅の数値を示したものである。これを見ると、長さ180cm～200cm、幅45cm～60cmの範囲に多くの底板が集中していることがわかる。棺の規模は最終的には被葬者の体格、埋葬姿勢などとも関連するため、ばらつきがあるのは当然であるが、それでも底板サイズが集中するエリアが認められることは、日常的な木棺需要を見越して一定サイズの「既製品」を作り、それを必要集落に供給するような地域内

の分業がこの時期に生まれていた可能性を示唆している。Ⅱ型木棺への標準化が進んだ背景には、こうした棺材生産・供給のシステム化を想定できるのではなかろうか。

実際は、規格的な底板を調達しても棺としてどれほどの空間を作るかは「現場合わせ」の要素も関わってくる。とくに遺骸との関係では棺の長辺内法が変動要因となるため、Ⅱ型木棺の場合、底板上のどこに小口板を設置するかがポイントになる。先の加美遺跡Y1号墳丘墓で周溝内埋土から大量に検出されたコウヤマキのチップは、小口板を固定するために底板との結合部分に加工を施した際の削片と考えれば整合的であるし、同じⅡ型木棺でも底板と小口板の組合せ方にさまざまな手法が見受けられることもこうした事情から説明が可能である¹³⁾。

さて、樹林近くに用材の獲得と棺材としての粗加工を担う集団が存在したと考える場合、ある集団が畿内一円のⅡ型コウヤマキ材木棺の材を独占的に供給する存在であったのか、小地域ごとにそれぞれ供給集団が存在したのかは、中期中～後葉の畿内社会の性質を考える際に考慮すべきポイントである。

現時点でこうした集落を突き止めた事例はないので断定は難しいが、先述のようにⅡ型木棺でも小口板にタテ目使いが優勢な河内とヨコ目使い優勢な摂津・播磨という地域差が見られるはある程度の参考になる。ふつう、木棺の横断面形は高さよりも幅の値が大きいので、小口板の平面形状もそれに応じた長方形となっている。したがって、タテ目使いを想定して調達した小口板を現地でヨコ目使いにする変更は、不可能とまでは言えないにせよ、棺としてのバランスにいささか不都合を生じさせると思われる。つまり、総コウヤマキ棺の場合、あらかじめ小口板の形状と木目の関係も織り込んだ上で、一棺分の粗加工した材をセットとして調達するのが通常のあり方だったのではなかろうか。

もちろん、各地の発注側からの仕様にしたがって畿内地域の特定の供給元が適切な部材を独占的に供給した可能性を否定するのは難しい。ただ、コウ

ヤマキの大木は畿内各所の山中に生育していたであろうから、あえて遠方の特定集団から入手するよりも、それぞれの小地域内で伐採や製材に手慣れた近隣集団から入手するという方が一般的であったと考えられる。中期の石庖丁石材の供給元が畿内の南北で異なる状況にも通じるところがある（酒井 1974）。

少數派の棺材流通 こうした「地産地消」の原則の中にあって例外的なのは、被葬者の親族系譜や集団間の交流を反映して異型式や異樹種の棺材が意図的に他集団から持ち込まれる場合である。畿内地域でもコウヤマキ材木棺が卓越する墓地に総ヒノキ棺、あるいは一部にヒノキ材を混用した棺が少数混在する例が多く見られる。たんなる材の寄せ集めの場合はともかくとして、このような異樹種木棺や異樹種混用木棺が存在する背景には、葬送の場において埋葬施設構築材が交流関係の確認を含む象徴的な意味を持つ場合があったことを示唆している。

現時点で弥生時代のコウヤマキ材木棺の飛び離れた東限をなす静岡県袋井市徳光遺跡のⅡ型木棺は、その極端な事例の一つといえるかもしれない（山本編 2006）。スギ材木棺地域と想定される遠江で確認された徳光遺跡例は、弥生中期～後期とされる重厚なコウヤマキ材を用いたⅡ型木棺で、小口板は河内に多いタテ目使いとなっている。おそらく、河内の集団となんらかの関わりのある人物の埋葬にあたって、同地域から一セットのコウヤマキ材木棺がもたらされたと見るのが妥当であろう¹⁴⁾。また、弥生中期後葉の土坑内から棺材の可能性があるコウヤマキの大型板材 10 点が埋納状態で出土した愛知県春日井市勝川遺跡の例（赤塚 1984）も、たんなる必需品の長距離交易にとどまらない意義を有していたかもしれない。

コウヤマキ材木棺の象徴性 弥生時代の遺存木棺の出土例は依然として畿内地域に集中しており、畿内以外での樹種選択のあり方はなお不詳な点が多いが、少しずつ蓄積されつつある情報を踏まえると、少なくとも東海以西ではスギ材の使用が多い傾向が浮かび上がっている。弥生時代のコウヤマキ棺材の確認例は、管見に触れる限りでは、西端が岡山県津山市京免遺跡（中山

1982)、東端が上述の静岡県徳光遺跡になるが、コウヤマキが域内の主要棺材として確認できるのは播磨東部、摂津、河内、大和などであり、今後山城地域での遺存木棺例の状況にもよるが、中期以降の畿内地域にかなり局限される傾向は変わらないであろう。さらに棺構造を加えていえば、コウヤマキ材のⅡ型木棺は弥生中期以降の畿内地域集団のアイデンティティと帰属意識の醸成を象徴するような存在であったと推定しておきたい。

4 古墳時代のコウヤマキ材木棺への展望

コウヤマキ材木棺と畿内弥生社会の関係をこのように考えるとき、その後の古墳時代に続くコウヤマキ材木棺の存在意義はいかに展望できるであろうか。古墳時代研究において、コウヤマキ材は畿内地域の古墳時代の王陵や首長墳の木棺樹種として頻用されることから、つとに研究者の関心を集めてきた。近年では岡林孝作氏によって古墳時代木棺の用材選択に関する研究が精力的に進められており、同時代のコウヤマキ材木棺の使用状況について研究の到達点がまとめられている（岡林2018）。

コウヤマキという樹木自体は、コウヤマキ属唯一の現生種であり、自生するのは日本列島だけである。現在は、飛地的分布を呈す福島県を除けば長野県から宮崎県にかけての日本海側を除く地域に分布しているが、岡林氏の精緻な事例集成に学ぶと、古墳におけるコウヤマキ材木棺の使用は樹種の分布域の全域にまんべんなく見られるのではないことが明らかである。長大なコウヤマキ材木棺が重要な意味を持った古墳時代前期で見れば、西限は兵庫県たつの市権現山51号墳、東限は愛知県犬山市東之宮古墳にあるものの、畿内を中心とする地域的な偏りがとくに顕著である。

コウヤマキは低湿地の発掘調査現場でも経験的にわかるように、耐水性がもっとも高い樹種の一つで、現在でも水桶、風呂桶など水回りの器物作りには欠かせない良材として重用されている。しかし、実用面できわめて優れた特性を持つなら、威信財を含めた長距離物資移動が盛んな古墳時代には、さ

らに広域でコウヤマキ材木棺の波及が見られても良いように思われる。しかし、実態はそうではない。初期ヤマト政権の王陵を含めた畿内地域の有力古墳にこぞってコウヤマキ材木棺が求められた最大の理由を探すとしたら、弥生時代における畿内地域集団の精神的なまとまりの一要素でもあったコウヤマキ材選択の伝統が継承されたためと考えるのがもっとも妥当であろう。

前章で整理したように、弥生中期中～後葉頃にコウヤマキ材木棺のⅡ型木棺として標準化された畿内地域の埋葬容器は、その後弥生後期後半以降には形態のバリエーションを増しつつも、小口板のヨコ目使いという共通性を強化しながら、前期古墳の長大な木棺につながっていったと考えられる。古墳前期のコウヤマキ材割竹形木棺の稀少な完存例である八尾市久宝寺1号墳において、円形小口板が正確なヨコ目使いで設置されていたのは、弥生時代以来の畿内地域の伝統をよく示している（西村編2003）。

弥生中期中～後葉におけるコウヤマキ材Ⅱ型木棺の標準化は、拠点集落を核とする共同体内の自給を基本としながらも、特産品的な物資を近在の共同体間で互恵的に交換しあうような「弥生型社会」の中で生まれた現象であった。当然ながらこうした社会が階層分化の末に変質した弥生後期後半以降には、以前と同じレベルでの標準化は崩れたであろうが、上位階層に転じた有力者はコウヤマキ材をみずから選ぶ木棺とする地域伝統を引き続き維持していたと理解できるのである。

おわりに

事例が少しずつ蓄積されてきた弥生時代の木棺墓について、構造と棺材樹種の面から現状を整理するとともに、畿内地域においてコウヤマキ材のⅡ型木棺が主流派となり標準化される実態とその背景を、同地域の弥生中期社会の特質と関連付けて理解してみた。自分がどの地域集団に所属しているのかという意識は、広域の物資流通と人間交流が拡大する弥生中期以降には、人々にとって不可欠なものになったと推定される。こうした中でコウヤマキ

材木棺は、畿内社会のまとまりや住民の所属意識を確認する上で一定の役割を担っていたと考えた。

さらに、弥生時代のコウヤマキ材木棺と畿内地域とのつながりが、古墳時代畿内地域におけるヤマト政権の王陵や有力首長古墳の棺材樹種選択を導く淵源になったのではないかとの見通しも提示した。ヤマト政権成立時の定型化前方後円墳の出現にあたって、そこに取り込まれた墳丘、外表施設、埋葬施設、副葬品目などの要素がほとんど畿内以外の地域に由来するものであるから、そうしたヤマト政権成立過程における畿内地域の中核的役割を評価しないという議論に触れることがある。はたしてそうであろうか。

前方後円墳のまさに核心をなし、ヤマト政権中枢の王や畿内地域の有力首長が最期に身を委ねた埋葬容器がコウヤマキ材木棺であった事実は、その人物が弥生時代以来の畿内地域集団に祖先系譜を持つと意識していたことの強い表れというべきであろう。また、古墳時代を通じてコウヤマキ材木棺の使用が畿内地域の有力者の間に限定される傾向が顕著であること、さらには古墳祭祀に組み込まれたさまざまな儀礼的木製品の樹種としてコウヤマキ材が重用されたことなども、コウヤマキを通じたヤマト政権と畿内弥生社会の歴史的結びつきを示唆しているように思われる。

素朴で実用性が前面に出た弥生時代木棺ではあるが、その存在はヤマト政権成立過程における地域関係にアプローチできる隠れた鍵の一つになりうるかもしれないのである。

[註]

- 1) たとえば、縄文晚期前葉と報告されている御堂遺跡（水島 1991）の事例についても、調査報告書の記載を再検討した中村健二氏は弥生前期に属するものとの見解を示しており、晚期前葉を見る大庭孝夫氏や澤下孝信氏らとは理解を異にしている。
- 2) なお、滋賀県大津市滋賀里遺跡では仰臥屈葬人骨の頭部と足部に大きな方形坑を穿った墓葬が検出されている（田辺・加藤編 1973）。これを小口穴と見れば近畿縄

文晩期後半の定型的なⅠ型木棺ということになるが、その場合でも同遺跡の墓葬の中では例外的な方なので、そうした木棺墓の構造規範が成立していたとはみなさない。

- 3) 弥生前期～中期前葉の小口穴のない墓壙に木棺が使用されていた場合を勘案すれば、Ⅱ型が多く使用されていたと見る余地もありうるが、棺材の残る資料が多い堀部第1遺跡や山賀遺跡などの事例が蓄積された今日では、中期前葉までのⅡ型は相対的に少数派であった可能性が高いと考えている。
- 4) 筆者は、移入者が移入先の墓地に埋葬される場合に、その棺材調達や墓づくりに出身集団の者が関わることが一般的に行われており、その結果、両集団間の採用する棺型式が異なる場合に異型式棺として顕在化するのではないかと推定している。
- 5) 兵庫県丹波市春日七日市遺跡、岡山県岡山市みそのお遺跡、鳥取県倉吉市阿弥大寺墳丘墓群などが各地域の一例である。Ⅰ型木棺は弥生後期の東日本でも、長野県から群馬県にかけて礫床木棺墓に多く用いられている。
- 6) 玉津田中遺跡の棺材樹種については、光谷2016を参考にした。
- 7) 2002年の瓜生堂遺跡の報告書の中で、当時畿内地域で検出されていた実物木棺のうち、3箇所以上の部材の樹種が判明している39例について実態が検討されており、第Ⅲ様式～第Ⅳ様式にコウヤマキ単材の例が多いことが指摘されている(多賀・岡田2002)。
- 8) 田中氏は、Ⅱ型式木棺の底板の両端部分に溝状の抉り加工を施すもののうち、溝が底板の幅一杯に貫かずホゾ状になるものをⅡa型式として、最高ランクの木棺形態ととらえている。
- 9) 15号方形周溝墓主体部木棺と40号方形周溝墓主体部木棺の底板が光谷拓実氏によってコウヤマキ材と同定されている(光谷2015)。
- 10) 小口板の木取りについては、中期の大和、山城、和泉の状況は資料的になお不明である。近江では草津市烏丸崎遺跡で、中期中葉のスギ材Ⅱ型木棺でタテ目使いが2例見られる。同遺跡の他の墓葬では木棺の遺存がなく、タテ目使いが近江で多数派となっていたのかどうかは類例の増加を待って判断したい。なお、近江では中期の守山市服部遺跡でもタテ目使いが1例確認できるが、重厚なコウヤマキ材の木棺であるため、河内からの搬入品の可能性も考えられる。
- 11) 加美遺跡では庄内式～布留式期のⅡ型木棺6基がヨコ目使いである(田中編2015b)。
- 12) 実物木棺が出土した東大阪市若江北遺跡で行われた花粉分析では、木棺墓の時期に近い弥生中期末～後期には、遺跡周辺から生駒山地山麓にかけてはカシ類の照葉樹林が存在し、生駒山地の山腹から山頂はモミ、アカマツ、ツガ、コウヤマキ、スギを要素とする中間温帯林に覆われていたとの植生復元がなされている(渡辺

1995)。

- 13) 側板を底板上に置くか底板に外接するように置くかの違いも、調達した底板の幅に応じて棺の組み立て時に現地で対処した結果と見ることもできる。
- 14) 徳光遺跡の木棺はⅡ型タテ目の河内の中期中葉～後葉に通有のタイプであるが、底板の両端部を小さくコの字状に抉っている点が異例であり、山本編 2006 ではここに杭を打ち込んで小口板の固定を図ろうとしたのではないかと指摘されている。小口板の固定方法を現地で独自に工夫したことを示唆する構造ともいえよう。

[参考文献]

- 赤澤秀則ほか 2005『堀部第 1 遺跡鹿島町福祉ゾーン整備事業に伴う調査 1』鹿島町教育委員会
- 赤塚次郎編 1984『勝川 名古屋環状 2 号線建設に伴う発掘調査報告書』(財) 愛知県教育サービスセンター
- 浅岡俊夫編 2000『口酒井遺跡—第 1 次～第 10 次・第 12 次～第 16 次調査の概要—』伊丹市教育委員会・六甲山麓遺跡調査会
- 伊藤智ほか 2017『古屋敷遺跡(A・E 区)』島根県教育委員会
- 上野利明編 1987『鬼虎川遺跡第 12 次発掘調査報告』(財) 東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会
- 大橋信弥・山崎秀二編 1985『服部遺跡発掘調査報告書 II—滋賀県守山市服部町所在—』滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会
- 大庭重信ほか 2016『加美遺跡発掘調査報告書 VII』大阪文化財研究所
- 大庭孝夫 2002「北部九州における木棺墓の展開～裏込・棺台に石を使用するものを中心に～」『究班 II』25 周年記念論文集編集委員会
- 岡林孝作 2018『古墳時代棺槨の構造と系譜』同成社
- 岡村涉編 1997『有東遺跡第 16 次発掘調査報告書』静岡市教育委員会
- 小田富士雄 1964『亀ノ甲遺跡福岡県八女市室岡の弥生遺跡調査概報 1963 冬』八女市教育委員会
- 小野木学編 2015『荒尾南遺跡 B 地区 II (第 1 分冊)』岐阜県文化財保護センター
- 甲斐昭光編 1996『玉津田中遺跡—第 5 分冊—(竹添地区・池ノ内地区の調査)』兵庫県教育委員会
- 金闇恕 1961『梶栗浜遺跡』山口県文化財概要第 4 集』山口県教育委員会
- 龜井聰編 2009『山賀遺跡 II』(財) 大阪府文化財センター
- 龜井聰ほか 1995『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告—第 4 次—』(財) 大阪文化財センター
- 河内考古学研究会木棺研究グループ 1968「弥生時代の木棺について」『帝塚山考古学』

- 川上厚志・井上麻子 2014「北青木遺跡第7次発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 栗野克巳ほか 1992『瀬名遺跡 I (遺構編I)』(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 小竹森直子編 2008『烏丸崎遺跡・津田江湖底遺跡』滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会
- 小林義孝編 1992『田井中遺跡発掘調査概要・II』大阪府教育委員会
- 酒井龍一 1974『石庖丁の生産と消費をめぐる二つのモデル』『考古学研究』第21卷第2号
- 酒井龍一 1982「畿内大社会の理論的様相—大阪湾沿岸における調査から—」『龜井遺跡』財団法人大阪文化財センター
- 澤下孝信 2009『縄文時代の木棺墓一下関市御堂遺跡例の検討—(上)』『下関市立考古博物館研究紀要』第13号
- 澤下孝信 2010『縄文時代の木棺墓一下関市御堂遺跡例の検討—(下)』『下関市立考古博物館研究紀要』第14号
- 篠宮正編 1994『玉津田中遺跡—第一分冊(徳政・二ノ郷・黒岡地区の調査)』兵庫県教育委員会
- 清水尚編 1992『一般国道161号線(高島バイパス)建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書IV 針江北遺跡・針江川北遺跡(1)』滋賀県教育委員会
- 新宅信久編 2002『江辻遺跡第5地点—弥生時代早・前期墓地群の調査—』柏屋町教育委員会
- 相馬勇介ほか 2018「河内平野における初期方形周溝墓群とその構造—東大阪市近大山賀遺跡第5次発掘調査の再整理・報告編—」『民俗文化』近畿大学民俗学研究所
- 多賀晴司・岡田佳之 2002「方形周溝墓について」『瓜生堂遺跡第46、47-1・2次発掘調査報告書』東大阪市教育委員会
- 田代克己ほか 1981『瓜生堂遺跡III』瓜生堂遺跡調査会
- 田中清美 1994「河内地域における弥生時代の木棺の型式と階層」『文化財学論集』同刊行会
- 田中清美編 2015a『加美遺跡発掘調査報告書V』大阪文化財研究所
- 田中清美編 2015b『加美遺跡発掘調査報告書VI』大阪文化財研究所
- 田中祐二編 2011『府中石田遺跡—舞鶴若狭自動車道建設事業に伴う調査—』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 田辺昭三・加藤修編 1973『湖西線関係遺跡調査報告』滋賀県教育委員会
- 玉井功ほか 1981『巨摩・瓜生堂』(財) 大阪文化財センター
- 鳥越憲三郎ほか 1972『勝部遺跡』豊中市教育委員会
- 中西克宏 1986『久宝寺遺跡発掘調査報告—久宝寺址緑地公園内雨水貯溜池築造工事に伴う発掘調査—』(財) 東大阪市文化財協会
- 中村健二 2002「木棺墓小考—近畿地方における木棺墓の出現を理解するために—」『究

- 班Ⅱ』25周年記念論文集編集委員会
中山俊紀編 1982『京免・竹ノ下遺跡』津山市教育委員会
西口陽一ほか 1984『山賀(その3)』(財)大阪文化財センター
西村步編 2003『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書V』(財)大阪府文化財センター
野島稔編 1987『雁屋遺跡』四條畷市教育委員会
橋本久和ほか 1977『昭和51・52年度高槻市文化財年報』高槻市教育委員会
林健亮編 2017『古屋敷遺跡(D区)』島根県教育委員会
原口正三ほか 1977『高槻市史 第一巻本編I』高槻市役所。本文献については、今西康宏氏のご教示を得た。
春成秀爾 1985『弥生時代畿内の親族構成』『国立歴史民俗博物館研究報告』第5集
廣瀬時習編 2008『池島・福万寺遺跡5』(財)大阪府文化財センター
福井英治ほか 1982『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市教育委員会
福永伸哉 1985『弥生時代の木棺墓と社会』『考古学研究』第32巻第1号
福永伸哉 1987『木棺』『弥生文化の研究』8 祭りと墓と装い 雄山閣
福永伸哉 1991『木棺墓と人の交流』『原始・古代日本の墓制』同成社
福永伸哉 2001『邪馬台国から大和政権へ』大阪大学出版会
本間元樹・向井妙編 2007『山賀遺跡』(財)大阪府文化財センター
水島稔夫 1991『御堂遺跡(山口県下関市大字永田郷地内御堂遺跡発掘調査報告書)』下関市教育委員会
光谷拓実 2015『加美遺跡出土木棺材・木片の年輪年代』『加美遺跡発掘調査報告VI』大阪文化財研究所
光谷拓実 2016『雁屋遺跡出土木棺材年輪年代調査』『四條畷市史』第五巻、四條畷市
森井貞雄ほか 1983『山賀(その2)』(財)大阪文化財センター
山本義孝編 2006『遺跡でたどる袋井のあゆみ 第一弾 旧石器時代～弥生時代の巻』袋井市教育委員会・袋井市立浅羽郷土資料館
横山邦継ほか 1975『板付周辺遺跡調査報告書(2)』福岡市教育委員会
若林邦彦編 2004『東大阪市所在瓜生堂遺跡2 寝屋川南部地下河川若江立坑建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)大阪府文化財センター
渡辺正巳 1995『若江北遺跡における花粉分析』『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告—第4次—』(財)大阪文化財センター

(人文学研究科教授)

SUMMARY

The development of wooden coffins made from Kōyamaki in the Kinai region during the Yayoi period

Shin'ya FUKUNAGA

Wooden coffin tombs are a new burial style that was introduced from the Korean Peninsula at the beginning of the Yayoi period. They are important archaeological material for examining the funeral customs of the time, but because the wood used is rarely preserved, it is still difficult to examine the style on a national scale. In this paper, the author compiles data on approximately 200 wooden coffins whose materials remain and whose tree species have been identified, and examines the coffin structure and the tree species used.

As a result, it was revealed that there are two types of wooden coffin structures: Type I, in which an edge board is placed on a bottom board, and Type II, in which an edge board is elected in a hole dug in the bottom of the burial pit, and that the latter was the majority in the Kinai (central Kinki) region from the middle Yayoi period onwards. In terms of the tree species used for coffins, cedar and cypress are common outside of the Kinai region, while Kōyamaki (Japanese umbrella pine: *Sciadopitys verticillata*) is overwhelmingly used in the Kinai region.

From this, it is inferred that the use of Type II wooden coffins made from Kōyamaki was significant for the people of the Kinai region as a confirmation of their regional identity. Furthermore, considering that the kings of the Yamato Kingdom, Japan's first unified kingdom, used those coffins made from Kōyamaki, the author believes that the core power of this kingdom was the elites of the Kinai region.